

社会を明るくする運動作文コンテスト

幅聡美さんが
全国保護司連盟理事長賞
阪下愛実さんが岐阜新聞社賞



國島市長と中野谷教育長へ受賞報告に1月16日、来庁されました。

法務省が主催する「第69回社会を明るくする運動」作文コンテストで、南小学校6年の幅聡美さんが全国保護司連盟理事長賞を受賞しました。このコンテストは、小中学生に日常生活や学校生活などで体験したことを通じて、犯罪や非行について考えたことや感じたことを作文として募集するもので、今回は全国から約34万5千点の応募があった中から選ばれました。

また、清見小学校6年の阪下愛実さんも、同コンテストの岐阜県審査で岐阜新聞社賞を受賞しました。今号では、2人の作文を掲載しますので、ぜひご覧ください。

「社会を明るくする運動」は、全ての国民が、犯罪や非行の防止と罪を犯した人たちの更生について理解を深め、それぞれの立場において力を合わせ、犯罪のない地域社会を築こうとする全国的な運動です。

高山保護区保護司会などで構成する高山市推進委員会では、コンテストの作文募集に加えて、毎年『社会を明るくする運動「少年の意見発表会」を開催し、地域の皆さんに小学生の意見を聴いていただいています。

だれもが笑顔でいられるように

「YESかNOで答えて下さい。」

先生が黒板に質問を書き始めました。一つ目の「困っている人がいたら進んで助けて」と、二つ目の「昔の失敗をいつまでも悪く言うのはおかしい」という質問は、どちらか私がそうしたいと思っていること。それは、ふつうにしていかなければならないことでした。私の答えはもちろん「YES」です。しかし、三つ目の質問を見たとき、クラス中がどよめきました。それは、「逮捕されたことがある人が、近所に住むのは嫌だ」というものでした。逮捕されたのが昔の事だとしても、警察のお世話になるくらい悪いことをした人なら、また何かするかもしれない、何か危害を加えられるかもしれないと思えました。だからこの質問にも「YES」と答えました。「昔の失敗をいつまでも悪く言うのはおかしい」という考えとは矛盾していますが、怖さが勝ったからです。

その後、ビデオを見ました。内容は刑務所を出所した人の話でした。懸命に仕事を探してもなかなか見つからず、家族ともギクシャクしてしまう。しかも、職場の人を信用して自分のことを話したら、職場でも居場所を失ってしまう。そんな苦しい状況が語られていました。このビデオを見て、私の考えは正反対になりました。犯罪は許されることではないけれど、反省し、罪をつぐなおうとしている人には、チャンスが必要ではないかと思ったりからです。「私たちが変わらなないと、こんな社会は変わらない。」そう考えました。

私にできることは何か、変わることは何か考えてみた時、ふと家族とのことが頭に浮かんできました。私には兄弟がいまいません。一人っ子です。だから、何かあったときに家族に色々ぶつけてしまうことがあります。ある日、私のお気に入りのぬいぐるみが、突然消えてしまったことがあります。その時、触るとしたら家族に違いないと、「どこやったの?」と怒りながら

南小学校6年 幅 聡美

聞いてまわりました。探しても探しても見つからず、焦りと怒りがこみ上げてきました。

「本当に触つたらんのやおな?」と何度も確認しました。それは、前にも同じようなことがあったからです。

でも、ふと友達と交換していたことを思い出しました。ただ単に、私が忘れていただけのことでした。自分がやっていないことを、「さとちゃんのせいだ。」と言われたら嫌なのに、それと同じ事を私もしてしまったと気付きました。

こうやって考えてみると、私には遠い世界にあると思っていた偏見の念が、意外と近くにあったと気付かされました。

私ははじめ、犯罪をした人だからまた何かするかもしれない、と決め付けてしまっていました。でも、その決め付けのせいで、家族にも嫌な思いをさせてしまっていました。自分は差別や偏見をもっていないつもりでも、気づいていないだけで、もしかしたら苦しませてしまっていた人や、これから苦しめてしまう人が出てくるかもしれません。そう考えると、少し怖くなりました。

正直、犯罪をした人が側にいたら怖いんです。だからといって、勝手な決めつけでは、問題は解決しません。社会全体が協力し、偏見の思いをもつ人を一人でも減らしていくことが大事だと感じました。

私にできることは少ないかもしれませんが、まずは、自分から変わっていきたいです。相手の立場に立って考えてみて、それでも分らなかったら、話を聞いて理解しようとしていく。お互いのことを知ることで、相手を認めることができるようになると思います。

そうやって互いを理解し、だれもが前を向いて、笑顔でいられる社会にしていきたいです。

